

主論文の要約

張 雅婷

1990年代以降、日本語で小説を発表する外国人作家たちが日本文壇に続々と登場した。従来のいわゆる在日文学とは異なり、あえて自らの意思で母語以外の日本語を創作の手段として選択した作家たちであった。ユダヤ系アメリカ人のリービ英雄は、そうした新たな日本語作家たちの先駆的、かつ代表的な存在である。

本研究は、リービ英雄の発表した、小説、評論、エッセイ、対談など広汎なテキストを対象にして、その創作の私小説的特性を考察するものである。そしてその中心的な狙いは、リービ英雄の創作活動における台湾経験の影響を解明することにある。リービ英雄は、外交官である父の仕事のため、幼少期を台湾で過ごしている。その異郷で、両親は離婚し、父は台湾で知り合った上海出身の中国人女性と再婚した。こうしてリービ英雄は、母と重度の知的障害をもつ弟と共にアメリカに戻らざるをえなかった。しかし1967年、横浜のアメリカ領事館に転任した父を訪ねる。そしてその時の日本体験こそが、彼が日本語作家としてのキャリアを切り拓く転換点となった。もちろん、リービ英雄の越境経験は、台湾や日本の場合には限られない。1993年以降における中国体験もきわめて重要であり、とりわけ、最初の北京滞在は、台湾での幼少期の記憶が喚起されるという決定的な出来事をもたらした。以後、リービ英雄は、台湾で家庭崩壊を経験したにもかかわらず、終始台湾を「故郷」であると明言することになる。本論文は、リービ英雄の多様な越境体験の記述を分析しながら、彼の人生、及び創作の原点になった台湾経験を考察するものである。これまでの研究では、西洋出身の日本語作家としての彼の越境体験はしばしば強調されてきたものの、彼の台湾時代の経験、特に、創作活動全体における台湾記憶の重要性については十分に解明されてこなかったのである。

本論文はまず、序章において、問題意識の全体とその意義、および研究方法を提示し、その後に5つの章を用意している。以下各章の概要を示す。

第一章では、リービ英雄の描く父親像の変貌を検討する。処女作『星条旗の聞こえない部屋』(1992)は、17歳の白人青年が父との確執を深めて在横浜アメリカ領事館から家出し、新宿の日本語世界に踏み込んだ、その放浪の体験を中心にしている。リービ英雄のこの第一作は、以後のすべての小説と同じように、リービ英雄の実人生にきわめて即したもので、私小説的作風をとっている。ここで描かれた父親は、その「ユダヤ出自」や「中国文明の教養」なども言及されているが、中心となっているのは、

息子の立場から見た権威的イメージである。主人公は、そうした父に対抗するため、日本人たちからは「外人」と拒否される場面に遭遇しながらも、日本語を自らの表現手段として獲得したのである。しかしながら、こうした父との対立関係は、その後の小説「ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行」(2002)や短編「我是」(2008)においては変化を遂げている。主人公は、中国開封のシナゴークを訪れたことをきっかけに、ユダヤ人のディアスポラの歴史を、「越境」の比喩にとらえ、そこにポジティブ的な意味を見出し、ユダヤ出自の亡き父への思いを吐露している。

第二章では、リービ英雄文学の中では十分研究されていない、「母」、「弟」、「アメリカ」という三者について考察する。ここでもリービ英雄は私小説的手法をとり、小説「ノベンバー」(1989)は、1960年代初頭のアメリカにおける母子家庭状況を、特に、神経衰弱の母を語り、「国民のうた」(1997)では、ここで初めて、かつ、ここだけで、知的障害者の弟を大きく登場させ、その養護に苦悶する母の姿に焦点を当てている。知的障害児を抱えたことで夫婦関係が変化し、それが両親の離婚にもつながったこと、また、母と弟と一緒にアメリカに戻った後、弟の介助役を担わされることになったこと、障害児を抱える母子家庭の困難が、父と使用人の居た台湾の家を懐かしませたこと、さらに、それが窮屈なアメリカから逃げ出したいという欲望を生じさせたことなどを考察する。リービ英雄における知的障害者像に対しては、津島佑子による批判がある。津島には、ダウン症の兄があり、自らのその経験を題材にした小説を発表している。本章では、津島とリービにおける、障害児を抱える家族の描き方の違いを分析することで、リービ英雄の特色を明らかにする。

第三章では、台湾記憶をはじめて中心に据えた作品である小説『天安門』(1996)を取り上げる。そこには、1950年代の台湾をめぐる複雑な歴史的な文脈が関与している。住んでいた台中の、庭付き木造家屋は、日本人植民者が残していったものである。そこに溢れる言語はもはや日本語でもないし土地の言語でもない。中国共産党に追われて本土から来た将軍たちの北京語である。この特異な台湾の家は、冷戦時代を背景に毛沢東や共産党の脅威にさらされ、また本省人や彼らの話す台湾語に対する恐怖にも浸透されて、リービ英雄の原風景を形成している。こうした解明とともに、日本統治時代の「大和村」から戦後の「模範郷」への現実空間の変化に照らし合わせながら、小説の中に描かれた主人公の空間体験を検証する。さらにまた、同時期に台湾に滞在していたアメリカ人家族の体験と比較検討する。V. S. de Beausset一家は民間人として台湾に派遣されて、台北の北投付近の日本住宅に住んでいた。この家族の台湾経験を分析して、リービ英雄一家の場合との同異を明らかにする。

第四章では、小説「満州エクスプレス」(1996)に登場する「安部先生」像を考察する。ここでもリービ英雄の手法は私小説的であり、この小説は、1994年に安部公房の遺族らとともに訪れた旧満州での調査が基になっている。本章は、「安部先生」像と安部公房との差異に注目して、リービ英雄の創作手法を解明する。「安部先生」像の造形には、自らの台湾体験を基にした「異郷に自分の家がある」という意識に加えて、旧満州訪問で一層自覚された〈団欒願望〉という創作動機が重要な役割を果たしているが、それを考察するにあたって、安部公房とリービ英雄それぞれの作品に見られる「塙」の描写に注目する。台湾を「故郷」として捉えてきたリービ英雄は、「塙」の内側にある日本家屋や北京語の響きに「幸せ」を感じ取っているが、「塙」の外側にいる本省人とその解読不能な台湾語には恐怖を覚えていた。それに対し、故郷喪失者とされる安部公房は、満州の風景をストレートには作品化せず、要素にまで解体して、それを利用して、植民地や敗戦の記憶を描き出しているのである。

第五章では、リービ英雄における中国像の変貌を考察する。1993年以降、リービ英雄は、たびたび中国を訪れ、それにともなって、中国描写の比重が大きくなっている。本論文第三章で検討したように、中国は、最初、台湾記憶を喚起する装置として専ら描かれた。しかし、紀行集『我的中国』(2004)以降の作品になると、それ自身が創作活動の対象となる。日本語と中国語の同異に触発された小説『仮の水』(2008)、毛沢東の革命聖地での見聞を語った『延安』(2008)、さらに、河南省の農民を描く『大陸へ』(2012)など、中国が広範囲かつ多様な視点で描かれている。しかし、このような変貌は認められるものの、そこに通底しているのは、かつて家族で暮らした台湾への遥かな憧憬であり、リービ英雄は中国本土の古い路地や煉瓦の風景を通して、失われた時を探し求めているのである。